



TITLE:

中国雲南省におけるラフ女性の民族間遠隔地結婚—移動する女性の所在を巡る交渉—(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

堀江, 未央

CITATION:

堀江, 未央. 中国雲南省におけるラフ女性の民族間遠隔地結婚—移動する女性の所在を巡る交渉—. 京都大学, 2015, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2015-11-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19383>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により全文は2021-06-11に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	堀江 未央
論文題目	中国雲南省におけるラフ女性の民族間遠隔地結婚 ー移動する女性の所在を巡る交渉ー		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士論文の目的は、西南中国のラフ村落において進展する、地域間経済格差を背景とした女性の民族間遠隔地婚出について、女性たちの所在を巡る人々の交渉を描くことで、送り出し社会における家族と女性の位置づけの変化を明らかにすることである。送り出し社会の論理に着目することで、女性の移動に関する既存研究のなかでしばしば論じられてきた女性自身の行為主体性を強調する議論を相対化する。</p> <p>第一章では、中国国内および国際的な女性の移動に関する先行研究を整理し、構造対個人という既存の議論の構図を明らかにする。そして、女性の行為主体性に関する近年の議論の問題点として、弱者の立場に立って女性の行為主体性を強調するとはいえ、その解釈の主体が常に研究者の側にあったことを指摘する。その上で、当事者による人の行為の解釈の仕方に着目するエスノ・エージェンシーという手法を提唱する。また、これまでのグローバル・ハイパーガミーなどの議論において、女性の送り出し社会への視座が不足しており、送り出し社会に起こる変化をとらえるためには、女性を取り巻く人々が女性の行為主体性をどのように捉えているかをまず出発点とすべきことを指摘する。</p> <p>第二章では、このような問題意識に基づき、ラフ女性の遠隔地婚出をラフの論理から理解するうえで前提となる、ラフの秩序空間と婚姻慣行について論ずる。本論文の舞台となる村では、村の最上部の祭壇に座す山神と、各家の最奥部に据えられた家神を中心とする精霊祭祀が行われる。これらの神々が管轄するのは「オリ（秩序）」のある空間とみなされ、未婚者はこれらの秩序空間の内部で性交渉を持つことはできず、結婚によって初めて男女関係を村内に公にすることができる。ラフの親族組織は緩やかな双系制で、単系出自集団を形成しない。結婚においては、男女の双方向に「オヴィオニ（キョウダイ）」の関係が拡大することが重視されるが、そのような双方向の拡大が、漢族との遠隔地婚出では形成されえないことを指摘する。</p> <p>第三章では、1980 年代後半以降の調査村における遠隔地婚出の開始の経緯と変遷を提示する。中国では、1978 年末の改革開放以降、経済の対外開放に伴い、内陸部農村から沿海発達地域への人口移動が活発になった。それは地域間経済格差の拡大をもたらし、貧しい農村はヨメ不足に陥り、男性たちの西南中国へのヨメさがしの波を生み出すことになった。調査村において遠隔地結婚が起こったのは 1988 年後半からであるが、これは同年の瀾滄大地震によって村内の多くの家が倒壊し、生活基盤の崩れた女性たちが徐々に漢族男性との結婚を選んだことによる。遠隔地婚出は年々増大していったが、そこで重要な役割を果たしてきたのが、必ずしも組織化されていない様々な仲介者たちであった。1990 年代から遠隔地婚出に関与する様々なつながりをたどり、女性がひとたび「へパ（漢族）のくに」に婚出したいと思えば必ず実現できるネットワークが形成されてきたことを明らかにする。</p> <p>第四章では、遠隔地婚出を行った女性たちの主体性をめぐるラフの論理を分析する。婚出の時期や経緯、方法も異なる様々な女性たちを巡って、家族や親族たちが調査村においていかに語るのか、その語りの様相を提示し、女性の行為に対する原因の語りが時代によって変化してきたことを分析する。さらに、近年では、遠隔地婚出による生活基盤の向上というイメージが</p>			

さほど現実味を帯びず、女性たちの婚出は不可解なものとなされるようになりつつある。そのなかで、先行研究によって指摘されてきたような女性の行為主体性論とはそぐわないような、女性の行為の責任を本人に帰さない語り口があることを性愛呪術の語りから明らかにする。

第五章では、女性の婚出先である安徽省や河南省の農村に目を移し、婚出後の女性たちが生家と嫁ぎ先とのあいだで揺れ動き、最終的な居場所を決めかねて逡巡する様子を提示する。婚出先と出身地域のあいだの経済格差を背景に、女性たちは生活の向上を期待して遠隔地へと婚出してきたが、その後瀾滄県の経済状況は改善され始め、漢族地域への婚出の魅力はかつてほどなくなりつつある。近年では交通手段の発達によって移動が容易になり、里帰りを行う女性たちも増えているが、その多くは、里帰りの最中に、漢族夫との結婚を放棄して生家に残るか、それとも再び漢族夫のもとに戻るか逡巡する。里帰り女性を取り巻くかつての恋人や未婚男性など、調査村において女性たちの逡巡をさらに促進させるような諸状況を提示するとともに、このような女性の所在の不安定さと葛藤を描き出す。

第六章では、ラフ女性の所在を巡って調査村で行われる様々な交渉を描く。近年では、女性の葛藤や逡巡が顕著なため、彼女たちの属する家がどこにあるのかを巡って、生家の家族や男性たちのあいだで様々な交渉が行われている。まず、女性の父母が考える、娘の「炉の魂」のありかと戸籍を巡る処遇を論じる。ラフは、少なくとも二種の魂を持っており、「炉の魂」はその者の住む家の炉に据えられ、様々な病に対処する際にアクセスされる。これは結婚とともに生家から婚家へ移動するが、遠隔地婚出女性の「炉の魂」のありかについての意見は一貫せず、女性の親達には、娘の健康を維持し、不慮の事態にも何らかの対処を行う余地を残すような配慮がみられる。これは、近年存在感を増しつつある戸籍の処遇を巡っても類似の状況であり、そのような父母と娘の交渉の結果、女性の所在は多元化する。さらに、遠隔地婚出を受けて、村にいる未婚女性を巡る状況も複雑化している。配偶者の選択肢が増え、未婚女性たちが結婚相手を入念に吟味するなかで、ラフ男性たちは、結婚を確実にするために、結婚証を重視するようになっている。このこともまた、女性の所在が不安定になるなかで、ラフの規範よりも強固に女性にはたらきかけることのできる行政書類が重要な駆け引きのツールとなっていることを示している。

以上から、第七章（結論）で以下の三点をまとめとして論ずる。すなわち、1) 女性の行為主体性に関する議論を文脈化するためのエスノ・エージェンシー論の必要性、2) エスノ・エージェンシー論を論ずる土台として、人々の人格観念への探求が不可欠であること、そして、3) ラフにおいてその人格観念は家と強く結びついており、女性の所在と婚姻ステータスを巡って行政書類が交渉の対象になっていることも、このようなラフの家と人とのかわりから理解すべきである。これらの指摘によって、これまでのグローバル・ハイパーガミーや再生産労働の国際分業など、一連の類似の現象を巡る議論における女性中心的視点を相対化した。

(論文審査の結果の要旨)

本博士論文は、中国西南部少数民族ラフの女性たちが、遠隔地の漢族農村男性と結婚してきた過去20年あまりの状況を、雲南省のラフ村落における長期調査に基づいて、その変遷を追い、それに伴う送り出し側村落の対応と文化社会動態を明らかにしている。日中関係の悪化する中で、粘り強く現地で交渉して勝ち得た2年間の少数民族村落での調査許可と女性たちの婚出先への追跡調査とに基づく貴重な成果である。

近年、国際結婚や異文化間結婚の研究は盛んになっており、特に発展途上国の女性が先進国の男性と結婚する事例は、グローバル・ハイパーガミーとも呼ばれ、経済格差による構造的問題として概念化されてきた。そこでは女性たちは、遠方への婚出を余儀なくされた構造の被害者として描かれるか、あるいは、主体的選択をする者として描かれるか、議論は二分化されてきた。またそのほとんどは、女性の婚出先での調査がもとになっており、女性たちの出身地での体験や彼女たちを取り巻く近親者らの対応は、研究の視野に含まれてこなかった。本論文は、この「構造の被害者か、主体的な行為者か」という二者択一化した議論に疑問を呈し、また、後者で主張される女性のエージェンシーとは結局のところ分析者の読み込みに過ぎないのではないかと問うことから出発する。そして、女性たちを送り出している出身地における長期調査に基づいて、エスノ・エージェンシーという視点を提示し、揺れ動く女性たちの婚姻や居場所をめぐる選択を、女性たちのみの問題とするのではなく、両親をはじめとする周囲の人々の解釈や語りをとりあげて論ずる。それによって、遠隔地の漢族との結婚の増加が、中国の辺境にある少数民族地域の社会にどのような変化をもたらしているかを明らかにしている。

本論文は、以下の五つの学術的貢献によって評価することができる。第一に、中国語と現地少数民族言語であるラフ語を駆使して実施した民族誌的調査に基づき、現地社会の動態の詳細な記録を提示していることである。中国の少数民族研究は、現地調査の困難もあり、これまで民族の表象や客体化、民族を巡るポリティクスなどのテーマに集中し、また、対漢族という固定的な非対称性と二項対立を所与とする傾向があった。近年、日常経験に基づく少数民族研究も少しずつみられるが、本論文は、その上で、婚姻の変化をめぐる家族や村落内部の社会関係の変動について具体的に記述している点で、他に類を見ない。長期滞在に基づく詳細な民族誌的記述であると同時に、固定的な民族間関係を脱し、婚出する女性を通じて、少数民族の日常を、動態的にとらえた優れた民族誌である。

第二に、中国全土に広がる経済格差に基づいた女性の婚姻のための移動という現象について、20年を超えるスパンでの変化を詳細に把握し、一元的にみなされがちな少数民族女性の移動の変遷を明らかにしている。中国でも社会的関心と呼び、研究も少なくない現象であるが、従来の研究のほとんどは、マクロな統計資料と、女性の流動の要因やプロセスを婚出先の女性たちを対象とした調査のみに基づいて分析するものであった。本論文は、主として女性たちを送り出す側の出身村における調査に基づき、出身地社会の生活経験の多様性によって生じる個別性をも考慮し、また送り出す側が経験する葛藤や様々な調整・交渉が行われることを明らかにしている。

第三に、従来の遠隔地婚出女性や、グローバル・ハイパーガミーの研究に見られた、女

性たちを構造の被害者として描くか、あるいは、自ら選択し行為するものとして描くか、という二者択一を脱して、現地の日常に密着し、現実に基づいて女性たちの行為や選択の諸要因を描いている。そのために筆者は、エスノ・エージェンシー論というアプローチを提案している。これは、行為を解釈する視点を当該社会の人々に据え、現地の人格観念とのかかわりから人々の相互交渉を捉える手法であるとし、女性たちと彼女たちを取り巻く人々のどのような交渉や選択の結果として遠隔地婚出がなされ、それが現地でどのような選択として語られるか、現地社会における規範への影響とともに詳細に検討している。それによって、二極化した議論のいずれにも与することなく、その間で揺れ動く女性たちと周囲との関係についての現実をとらえ、豊かな民族誌を可能にしている。

第四に、こうして描き出した事象から、現地における人格観念や婚姻について分析を加え、女性たちの遠隔地婚出に伴う往来によって、その所在も、何をもって婚姻の成就とみなすかも、曖昧化していることを指摘している。村の性的規範と精霊祭祀や婚姻儀礼による婚姻の承認、個々人の魂と家の関係、結婚証の発行と戸籍の移動などについて記述を重ねることで、婚姻の流動化と、人格のあり方や人の所在が多重化していることを指摘し、それに対して招魂儀礼や行政書類の登録などの手段を用いた交渉がなされることを明らかにしている。それは、人類学における婚姻、人格観念（パーソンフッド）や移動と所在にかかわる議論に対して、刺激ある貢献となっている。

第五に、以上の議論から、中国の辺境少数民族地域の包摂過程の議論そのものにも一石を投じている。ラフ村落地域が一つの慣習共同体として閉じた整合性を持つものではなくなっていることは、行政書類が重要な駆け引きの道具となっていることにも如実に表われている。しかしそれは、少数民族が漢族社会に通じる行政書類を用いることを余儀なくされ、国家に包摂されていく過程であると同時に、国家の制度を取り込んで自らの所在を明らかにする過程でもあることを説得的に論じている。

これらの点を総じて、本論文は、エスノ・エージェンシー論を通じて婚姻や人格観念の流動性・多重性を描き出し、中国における少数民族の民族誌、グローバル化する女性の移動などの文化人類学や地域研究の議論に貢献するオリジナリティの高い論文である。

よって本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年7月24日、論文の内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。